

内閣文庫

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1

内閣文庫	
番號	和 32569
冊數	394 (332)
函號	152 121

内閣文庫	
架	三二五九
冊	三九二
號	九
類	和書

天正十二年

大津藩松平右近衛組

二名 富士又市席信重

富士又市席信重

富士又市席信重

後三石

政市又席

同年定地百石と云ふ事

天正十九年八月三日相摸の國

のうちめと百石の地と云ふ事

慶長八年七月十日總の國を百石

此地を加へて凡そ百石

信重伏見京大坂宿並に奉り奉

度

寛永九申年二月廿六日

台徳院殿に湯之みりて合葬

と終り

正保三戌年正月廿七日死八十六歳

天正十亥年

長井又左衛門吉成養子

甲別先方元

大津藩松平石見守組 吉成 長井又左衛門吉成

吉成は、先甲別の武田家小
世に侍り、吉成若年の時より
勝頼に隨ひ軍功を著し、次
覆瀧の五枚堀割を築き、新
井家後志願小栗兼之助に
代りて、武田亡後、
神祖に不出され、本願と終りて

先方元とありて夫を大津守

小入家

吉昌小田系に没小とて

よと筑紫の沖陣小系とて

実ヶ原の没小山道の涉佐

大坂毎度の沖陣に隨ひ

元和三年十二月十七日死年十八歳

天正十七年三月十日

大津藩松平石見守組

戸田系信の法勝惣領

後三石 戸田平右衛門清久

後三石

石居系知と陸多とて父石列

下田(後)系知とて父石列及守

元和元年系知大坂の没小阿初

後中守正次と組小とて

石列系知とて首一級とて

とて石列系知とて

武列幡系知 東方村のうらめ

寛永三^丁年九月十六日^組新^組大御番^組河川山城守

天正十九寅年

大御番松平石見守組

三喜 大田加兵衛心造

四石後

大田加兵衛心造

三石武列入間那れうりは石
原并百俵のりせて二百石と給る
慶長十六^年十一月七日死回十二家

心

文祿元年

井出辰五郎重次男

駿河沖代官井出基助正次男

大津藩松平右近守組 二名 井出三右衛門正勝

同年定額二百石正勝

慶長八年七月十四日死三十五歳

心

文祿二年

大洲藩松平右近守組

三雲新左衛門成持總領

道中四浪人

改新左衛門

慶長二百年定知又百石と云ふ

慶長又二百年定知又百石の扱小随也

慶長九百年大洲藩組

同年沙加恩名凡子又百石

大坂後方の扱小云々

寛永十二年十月廿九日死六十五歳

一

文祿二年

大御書松平右近守組 三言若 勝勢甚盛 庶政

勝勢甚盛 庶政 三言若 涉書外之人

庶政大坂毎度の役共河津海津より
組小列して参上元和元年正月
七日甲首一級之得也

寛永三年四月廿日死甲田案

文祿二年

又祿二年相百出

大津書松平石見守組

三言 富永若翁守定

富永若翁守重惣胤

小系元

守定の父とて北条家に仕へ
氏康氏政より其感状を以て累代
の家臣なりと云ふに氏康没落此
地より野に遷るなり事と

神祖感し流して関東に在り
大津書松平石見守組
治る事

守定好一に命を賜ふ

事一きり

寛永八年四月廿七日死七十九歳

文祿四年

本邦書松平石見守組

三音平石見守組

國領才兼清一吉

國領孫三郎政吉兼領
上方浪人

同年江列甲賀郡八田村ありて之百

三十五石此地と給ふ

関ヶ原の役小川山道の清信一吉

あまの役にあつて死

寛永八年十二月廿六日死六十九歳

慶長三年

本所番松平貞守組

高木基重 法方三男

高木安富 法實

後二百軍石

又百六十三石

慶長四年二百軍石と見基重の

清本より分付

法實大坂あなは役小あさひ

寛永年中本所番組既

寛永年中沙加恩のりせて二百

六十三石とあり

寛永九申年二月廿六日

台徳院殿の御沙汰に御座りて

金^が御沙汰に御座りて

寛永十九年九月廿六日死六十五歳

慶長四亥年

慶長四亥年分知

大御書松本右近守組

高木甚左衛門

言書 高木甚左衛門

年号月日不知沙汰金御沙汰

関ヶ原大坂の役小者さうじ

其後沙汰恩二百石凡四百二十石
兼夜三年正月晦日死七十二歳

慶長四年

大津藩松平右兵衛守組

二言吉 宮崎守兵衛重次

宮崎守兵衛重次願

慶長六年信列波合津関所守

慶長又子年実ヶ原の役不隨也
此時旧地なるごとく信列下守系を
三百石に代りて遠列三列の
首税二万石に代りて合ヶ原
正保元申年二月十日於信列死
六十四歳

重次之骸と信列向家村宗園等に送る

慶長又子年

大御番松平右近守組

後泊たき清貞信惣願
實 服部久松清貞富

後二百四石
四百石

同年冥う系の役め海道の御供
—— 此後若陸正新後部のうち
あゝ二百四十石と送る
慶長七亥年父の送跡武列在系
那世田々谷願赤地村を二百六十石
と候送る凡四百石

大坂夏の役小阿部守忠守り
手に属してありしなり
寛永十三年 伊上藩の時箱根
伊殿と造りせらるるなり
とあり

寛永年中大津藩組

寛永十九年年祥入秋浦内蔵元

組

寛文九年三月廿九日八十八歳

慶長五年

大橋小海老之助親勝

大津藩松平右近守組

二百俵

大橋小海老親次

後継後守

慶長十六年伏見の三年島小島に
元和元年夏大坂の役小阿部
守忠守りし組小島にありしなり
天子守りにしと堪首一級と討取
実檢小島にありしと柄付あり
神妙ありとの作とあり

元和九年

東福門院極上被為附

同年沙加恩千石凡千二百石是頃の
二百俵八息男益太後親曾小治百
寛永三寅年十二月十八日叙爵
作出之九就後守と改む
寛永八未年八月十九日卒六十六歳

慶長七寅年正月十一日

本番松平石見守組

又岩

小野左馬助高盛

小野左馬助高盛

改 係 係 係
係十郎

之后上野色樂郡小大橋村浮戸
村舟渡川村阪野村とて又百石と
治す

慶長十六亥年阿部後中守組不
連りて伏見の三年處小系と
之後大坂幕度の改小隨也

寛永十九年十月八日大津安組宛

慶安元子年三月十三日津右丸
津右守在安城日津加恩二百石
為陸正麻為郡常生村陣形村
国末村長柄村平井村の内あり
法外凡七百石

京大坂の強盗に大津安組宛
のうらみありし事とて一家の
傳り欠るなり

慶安四年八月十六日布衣番と
免り

寛文三年十二月十三日死七十四歳

慶長七亥年正月廿六日

大津藩松平右衛門守組

江原孫美利金三男
津番外三人
三音石

江原孫美利金全

後孫六

同日新恩三百石と給ふ

金全京大坂付見れ宿直小兼り
奉後

寛永九申年二月廿六日

台徳院殿に清うのみりて金全
と給ふ

同年四月廿日清加恩二百石凡二百石

寛永十八年七月朔日死

慶長七年

大内番松平右近守組

小林平兵衛正房

言後 小林権次正吉

三石唐茶二百俵之旨

慶長十二年未年組 大内番松平右近守組

慶長七亥年

本陣書松平右見守組 置書若 加茂権在道(系心)

加茂権在道(系心)歿願

同年宗知以下を以て置書七十七名

法系系心伏見の三年書小系也

大坂西段の役小隨が所部佐守

組小列す

寛永七年八月廿一日死六十二歳

慶長七寅年

本番松平右衛門守組

三言

羽比奈六左衛門昌行

羽比奈新九郎昌親惣領

大坂夏の役小志さう飛夏の役
あそ阿部初作守組小連として
甲首として獲家

元和二年九月十三日
四代君に被高附

その後駿河殿に侍奉ありて
のち右殿に也

寛永十一年 月 日 大津
堀市正組小入

慶長七寅年

大津藩松平貞守組

大津藩松平宮内貞吉願

實 坂本久市重安

後三百七十五石

後小左衛門

又百七十五石

慶長十一年年父の遺跡三百七十五石

と給ふ

大坂毎度の役小左衛門の元其持

役に首級と討取

重安傳見系大坂村宿正小左衛門

度々

寛永十三年二月七日並沙加恩
二百石常陸の國信左郡本橋村
心慶村山王村めく治り凡二百
七十石

心保元申年六月七日死又十七歳

慶長八年

本村書松平右兵衛守組

二百石

心保元申年(忠利)

心保元申年忠利

本村書松平右兵衛守組

心保元申年忠利

二百石常陸の國信左郡本橋村

心慶村山王村めく治り凡二百

元和九年九月廿九日死

慶長八年

大津藩松平右近守祖

三言石
後之石

松浦忠登(親俊)

松浦忠登(親俊)の改姓

伊香外之入

慶長九年 武別新倉那水子村

少く二百石と云ふ

慶長十二年 伏見三年 改姓

元和六年 上総の國市原郡松原村

ありて加恩二百石凡二百石

元和九年 伏見の強盗浦小糸子

伊城宗の改姓と勢光

寛永二五年徳勘定と命せらる

十月勢先松をり

慶安元子年十月廿七日御先子換地既

同日沙加恩三百俵八百石

同年十一月晦日布衣着と虎さる

寛文元五年二月廿六日死八十歳

慶長十一年年正月十日

大洲藩松平石見守組

三喜 天野源隆重房

天野源隆の次惣願

後源隆の

付時父久次

常陸介殿後紀伊殿の沙幸

一属せらるは一千石

の地と治りし一ハハニ在り地三百石

と息男重房小治りして沙家小

治りしは大洲藩小入らる

慶長十九年大坂の役共阿初

後中守う組めく随分なると首級

と翻家

重房伏見京大坂村宿直小多
事夜

寛永元子年是近年以初
はくしおふそつとあきとそと貴
仍もて沙加懸百石下総の國昔
綿那相ヶ谷村あつて下つれ十石と
副り色凡百十石

寛永元子年大津番組取

京大坂の宿直に多事夜

寛永十年 月 日並沙加懸
又百石武蔵の宿直番組取宿村

蓮光寺村同宿直那万福寺村
あつて凡百十石

寛永十九年三月十九日御
同日水主百十人と取つて

万治元戌年七月十六日死六十九歳

慶長十一年

大津藩阿部備中守組

大津藩阿部備中守組 守定 惣領

富永 忠登 政吉

二百名
二百名

改吉伏見の三年番小系

元和元年夏大坂の役 阿部備中守

の組めりて 去る三月廿七日 坂城

二の丸小系を以て 款と討留する時

数帳一冊と方眼して 帰る

元和三年五月廿六日 大坂の戦費

少して 武彦國新倉 弱藤 柳比

うち田嶋淡修西村より二百石上総
玉成元はうち本田村より百石凡
二百石と修り

寛永十三年二月七日並沙加恩
二百石凡又百石

年號月日不知大洲書組既

之後年凡七百石
二百石凡七百石

之後京大坂の罷出小系より
復く

寛文元年六月七日死八十三歳

慶長十二年

本州藩阿波守組 二名 本自権之丞心重

本州権之丞心重願

後權守

之後新組二百石と修り

心重伏見三年番に在るより復く
正室大坂前後の戦ふ阿波守

正次組少列と修り

寛永十九年八月廿七日死二十九歳

慶長十二年

本陣所被傳守組

中川市助忠保願

旨 中川市助忠宗

後二百石

大坂此役小為さうひ復御陣如八
首一級と申す

元和四年八月十八日於大坂城在死す

元和七年八月十八日於大坂城在死す

忠宗之骸と杉州西成郡野田村

極楽寺に送る

慶長十二年

大津藩阿部守組

大津藩阿部守組又兼阿部重房

長井又玄師吉次

後之右衛門

改又兼阿部重房

大坂夏夜に及小あさう丸

元和三年父う遠跡又百六名

元和八年大津藩組頭

京大坂の御云御小田の事

度々

寛永十年

月

日並加登

二百石常陸の國行方郡笠田村
天楯村めあす下三九石
寛永十八年夏二条松井
孫左衛門にまうしに明の
寛の年二月奉書朱印て
江戸府にり家
寛永十九年三月十三日沖
留守居あす下の日沖加受二百石
下総北白海と那波屋村三河村
十日市場村中谷里村めて
すし色九石五百六石
寛永二十一年十月三日死す

慶長十二年

南畝阿波守組

松平與右衛門政信三男

二百石

松平源七而政重

改与五萬

六萬

二百石常陸の國行方郡笠田村
元和元年夏大坂の役不志と
五月七日甲首一と獲て所共
今村清右衛門なる下の時
惣之常羽依田源左衛門も首一はと
弓三之九めて

元和二辰年組大津藩松平丹後守組

慶長十二年

慶長十二年添目

大津藩阿波守組

二名 新見平助心威

新見平助の心重為願
即波外之人

後二名
又二名

心威京大坂此宿並小田の事
交し

寛永元年子年官月津加恩百二名
凡三百二名

寛永十年年二月七日並津加恩
二百石下総れうちには治平凡二百

二十石

兼盛二三年五月十九日死六十一歳

慶長十二年

南番河内守組

二名

坂本權十郎某

坂本守門貞吉男

坂本小左衛門重安男

其後新地二百石を甲列めく治り
大坂の役もあつた先首とあるは後
病ひめく勢ひの事かたはるは
年月日不知知仍上納

此より先十口とあるは相列高座那
津見村也位

兼盛二三年十一月廿日死

慶長十二年

大津藩阿部守組

大津藩出陣守組新次郎重吉

遠山富太郎宗繩

後回石

二名

慶長十六亥年父の遺跡四石

と給ふ

宗繩伏見京大坂川宿直下

事

大坂西度乃役に志す

寛永十三年二月七日並湯加恩

二百石凡六百石
慶安元子年三月十八日死

慶長十四酉年

本所藩所納御中守組

松浦保一而親政惣領
沖香外之人

言若松浦彦登(親勝)

後言言若
二百石

後保一而

大坂復元後と惣先

寛永二五年十月廿一日武列搦沃
那中殿村ありし加恩二百石凡二百
二十石

寛永十三年二月七日並加恩
二百石上総の國市原那菊間村永

吉村めて治守凡二百二十石
正保四年九月廿七日死年四十一

慶長十八年

慶長十四年波石出焼火之間御成

本洲藩阿波守御

依格基藩吉久三男

御辺留

宣

依格基次席吉政

後百平依
三百年依
四百平依

後深美

大坂の役も八を足りめりしり
その時の決定に足るはもの其
軍用小多しこれ其御成の列に
加へらばす三に吉政をそに
て大番に列し入武門の御備小
加りりうの家とたて役かきぬ

あやむら夫あては給ひし御供の
事と給ひしにこそ恩を感
りし御供と免さしこそ金
と給ひしに軍務に用ひし
作らし御供の御供と
給ひしと大坂の御供と
免めし阿波御守の御
にこそみ首級と獲家
の御供と新息二百俵
凡三百俵
之後馬様御供の時
應免させりし御
加恩百俵凡

寛永九^申年大御書組

四百五十俵
吉政伏見京大坂の宿
夜々々の夜毎に白浪禁
章其英殿と副て給
寛永十^酉年 月 日
二百石凡七百石
慶安四^卯年十一月廿
二百俵凡九百五十
兼延三^己年十月七日
六十歳

慶長十九年八月二日

本陣番河部俊中守組

二言 後 戸田六右衛門俊信

本陣番河部俊中守組奉書河部俊信

俊信より一十歳なりとて大坂
の役に父ふまゝとて花初をうけ
て志と感一のひて初弱なりと
原守二百俵と信父の僕と云て初をうけ
るも形いかにに府の
欠一クハ二事
秘一ナリト
俊信系大坂に参り小系と事
度

寛永三之寅年十二月二日初南海小笠系三夜守
組

慶長十九之寅年八月二日

南海阿波守組 二夜 戸田山三而清次

南海阿波守組平直(清次)願

此清次父に与るに元下りて大坂
の役小隨之と首級之得也は
新恩二百俵と給了

清次伏見の勢云備小系事度之
寛永九甲年七月廿九日初死三十四歳

慶長十九年

慶長十九年申小姓

大津藩河津守組

中將重吉 中將重吉 中將重吉

中將重吉 中將重吉 中將重吉

大坂安永此役小吉

夏河陣の時河津守組小

て一番小城系して二九之境首

二と討取二陣内惣兵隊人一等

市是古美高尾惣兵隊人一等

元和六年申年駿府此河津番に参り

寛永三年

駿河殿ト被為附

寛永十三年石川守組ト入
石川守組ト入

元和元年

元和元年

本河内守組

米為十倉の重直類願

伊書外之人

米為助三郎重勝

後七百卒石

後十倉門

重勝伏見京大坂の宿直ト入
左度々

寛永九年二月廿六日

台徳院殿此御ト入
金ト入

寛永十年二月七日並馬加受二百石

九七百卒石常陸の国めト入

寛文元五年、杉津河内北川除
を以て惣免九月三日、御てお借
十月二十日、杉津河内の國、此坊地、修
築の事に、芳行りと、そ貴令、御後
ニと、おつと

寛文二寅年十月、曾、河内廣浦番之取

延宝五己年三月廿八日、拜入

組

貞享元子年二月廿七日、死

元和元年

元和元年、被、召、取

大内番河内被、御、中、守、組

三信、河野権左衛門、通重

河野玄左衛門、通泰、次男
河内被、御、中、守、組

通重、幼、少、く、り、と

神祖、小、右、衛、門、小、左、衛、門、の、列、入、慶、長
九、辰、年、被、御、召、取、秋、元、長、節、と
り、同、僚、車、輪、一、長、八、節、と、為、り、
と、同、僚、一、長、八、節、と、為、り、と、同、僚、
と、同、僚、一、長、八、節、と、為、り、と、同、僚、
と、同、僚、一、長、八、節、と、為、り、と、同、僚、

立退人ふとて中しうもか悲雅
と助らんや明友の老なりと
云て秋えと昔ふ後府と立退
しうはそら南ちに河勢乳
と家つと一車とてと経糸
通重累代の立君つ不忠とて
唯あふ神とて平とて千悔とて
河敬亮とて頼いし河亮とて
定ふ大坂の礼とてりえ和え
卯年つらと一車とて井持揚殿
由孝小中一由孝う陣ふ加と
五月六日美江妻れとてうむに

先備の列とる一番に陰と
合せて奮然一はる小甲首
一級とてはて忠孝れうらうの
中せし一車つらうあふすくに
神祖の河旗中(甲首と物系し
本多上野介正純とて実検け
節と中りふに

神祖とつりさぬと河流とて色
て河若小石と先陳の戦乃者
河尋あつしに言(系)とせし
事明つらうなる
神祖作ゆさきし一はる河とて

ふかしのふの一番石比類なく
且忠孝の格揮きし一婦こを馬と
る川さす通きこの武者少と
父にたらしす是まその勢凡
とゆりし流ふの作と家り大坂
落城しそ後けぬに石おん
海の大津波に入らむと
元和元年康永三百俵と流り
寛永二年九月二日新に宋知
四百石と流りし是まその三百俵ハ
こうえーなふ

寛永三年十月 日御先地頭

同年流回公三千人と預流り
寛永六年五月十日御加恩
六百石上総國のうらめそりを
凡多石
寛永九年二月与力又勝と流り
流り
寛永十年 月 日御加恩
五百石凡千五百石
慶安四年五月十三日死六十八歳

元和元年

本國書阿波傳守組 三言 傳忠三郎心友

傳忠三郎心友
即書外之人

後深草

心友の父心治は平次心忠
伏見にて討死し、心友に依て
心友石出さるる大御方入らる
心友系大坂に宿直ふ事
あり

寛永九年申年二月廿六日

台徳院殿に書しつゝみとて金

と後

正保四年 月 日大坂御洗地
世傳沙加恩三百石凡又百石同心
五十人と預秀あり

寛文二年十月廿六日
免

寛文六年六月廿四日

元和二年

天正十八年改元

大坂御洗地

竹内と後
林田御洗

竹内源左衛門

寛永

大坂御洗

寛永九年二月廿四日

台徳院殿の沙

金

兼寛三年八月朔

元和二年

大内高河部俊中守組

青木三左衛門義玄殿

駿河中納戸

二言後

青木三左衛門義之

後四言

後三言在馬

義之伏見京大坂の宿直小納戸

寛永十三年二月七日並河加恩

二百石乞申す所の原米も定知あり

給ふと常陸のまけうち申す中へ

凡七百石

寛永十三年九月廿六日死

元和二年

本國阿波守組

後浦島時勝言
神君沖道習

後言主 松浦吉登吉成

吉成伏見系大坂北宿並ふ多

寛永九年二月廿六日

台徳院殿の御しごみうし合

と給ふ

寛永十年二月七日並加賀言

凡六百二十石

寛永十二年五月十二日死七十歳

元和三年二月十八日

大内書河初傳守組 言宗 遠山平信(政次)

遠山平信(政次) 遠山平信(政次) 遠山平信(政次)

政次伏見京北野宮に奉事
夜々

寛永十三年四月十二日死六十三歳

元和三年五月

大御番阿部左衛門尉助組

二言依 柳原左衛門尉政重

大御番御所御所司御所司御所司

二言依 柳原左衛門尉政重

改重付見京大坂の宿進小系也

寛永十三年正月

日 御所司

寛永十八年 月 日 御所司

二言依 柳原左衛門尉政重

正保四年六月 日 御所司

番の頭

慶安三宮年六月廿九日死

元和三年

元和元年被臣坐

大津藩河部左馬組

五百石 堀内主水氏久

堀内安房守氏若惣願

沙番外し人

氏久の父ハ堀内安房守氏若
々々紀列新宮ノ城主あり
六万石ほどの宗知と領して
在ハに慶長又ハ享和の
時中堀内若狭守氏弘津歌
々々々々沙紀明の事有
ハに氏若ハ津歌々々々々

明らうに徳一を道に守れと
京家の者小津味方せきんれを
祈願よりくく後収せりま
紀列加田村小つりて身面うぬ
こま子まのり成久父の處服を
そらきしれ後

神祖の神徳と云ふは侍人等
奉と彩を滋府の神城下に
造て御家へそらん奉と彩所
せ一奉十五奉石奉にりて
沙沙法と云ふり寸云ふ家小大坂
の夏神陳の時ひ一こふ奉と

一に二月七日

天樹院君城中山里郭まで出せ
らま一侍成久をい進一に
沙信乃女房刑部卿の局成久
と母

姫君と後一奉とせ一たいやと
姫君と孫一奉と沙信乃と
路々きり一とをきり一に刑部卿
此局沙信乃の沙守信小津經刀
と云ふ一と云ふ一に

姫君と信乃のなると柵垢と紙一
と我入矣おと云ふり一にと痛と

あしすけ系標はましくいふはひ
まうと坂崎出羽守の責はましく
あり出羽守一統御旗本にきて
こちとせしにうちりく感し
治し作と家つこま居

姫君あり事はなしと守の位ひ
こ功か那うらうらうにうひ
地を心の功にしろぬらひて

神祖

台徳廟れ御系にちきて感し
治し作と家つこま居
吉尾村大井戸村を又百石を治り

ちちらうはぬふけ夜大御書か入
ら家

成久系大坂れ御書にちちらう
夜

明暦三年八月廿日於二条城在死六十二歳
成久うあさ殿と洛外天寧寺
に送家

元和三年

大津藩河部左馬助組 三言後 吉本六重(清政)

後五百石

三言字三石

大津藩河部左馬助組安永(清政)實録

一 吉本六重(清政)二百俵を給ふ

清政京大坂の御会通小倉の事度々

安永九申年二月廿六日

台徳院殿此書にみよ〜て金

と給ふ

安永十年二月七日並御加恩

二百石九又百石

寛永十九年十一月十三日没目二百

六十三石是乞ふその二百石は之の替

慶安三年四月廿九日死四十五歳

元和未年八月旨

大津藩阿波左衛門組

大津藩阿波左衛門組三番首の忠利惣願

二百石

大久保保市市席忠元

後二百石

後改二百石

二百石列小宗知二百石と改り

忠元京大坂の警備小宗知の度々

元和九年十一月朔日父の遺跡

二百石と改り是迄の二百石併改り

九又百石

寛永九申年二月廿六日没り

一と金二十五と改り

明曆三十二年二月十九日死

元和七年

大津藩河津左馬助祖

大津藩河津左馬助祖中藩三右衛門

三右衛門

國領七右衛門(吉次)

後三右衛門

三右衛門(若余)

三右衛門(若余)三右衛門(若余)

三右衛門(若余)三右衛門(若余)

三右衛門(若余)三右衛門(若余)

三右衛門(若余)三右衛門(若余)

台徳院殿の御うらみとみりと合(若余)

同年三月九日同日三右衛門(若余)三右衛門(若余)

二百俵ハ二一〇一俵ニ平俵ハ拾二九
二百八十石余
寛永九申年四月八日新組南内後石見守組

元和八年

大洲藩阿波左衛門組

大洲藩阿波左衛門組各藩自當願

二百俵 服部久次郎貞常

後石見

政 冬備
後石見

二百俵并二百俵と拾二

貞常系大坂の勢に備ふ事
度々

寛永十三年二月七日並加三石
是より二百俵も定知小成一拾二
お換至大任郡城所村歩間本村めし

りうじに凡四百石

慶安元々子年六月四日大津番組取

同年同月六日津番ふるきて

姓をいじりて意に意きしはついで

組取と命せらるるとの作とある

兼意元存年 月 日津加意

二百俵凡六百石

明暦三年正月十九日居部

敷火ふらうと二月十九日合軍

三五一分小浪又女三下と居る

同年三月廿二日二条松の勢備ふ

系引ハ津喉白浪村時抜ニと

治りし明の年交に帰る

万治三年正月廿二日津目村と

命せらるる津目村小島副勢い

倉三作とある

同年二月九日飯津目村の勢方宜

とて津目村と命せらる

寛文二年正月十日西城の治敷

と免らるる

寛文二年八月十九日

禁裏附津加意千石凡六百石

同日たに

禁中此御入用多々有るは御費用

と省(三)作と爲りし

同年十月三日新恩の御書下し

と爲りし栞別河内迄那れ内あり

治りし

同年十二月三日御服資金及

時後三羽織と爲りし同月廿日

京悉

同年十二月廿三日叙爵御出さる

実東北御出さるしと爲りし唯の御奉

正月八日御後守と改む

同年九月廿八日京致と云十月

十日高小着し十二月廿四日

御方力目録と爲り

寛文四年正月朔日何れ終て

年始の賀に時後三と爲り

同年旦月十九日

禁中の御條目と後し治りし

同年六月三日日光の御札と爲

され八分ありと云十日日光小巻

十二日の御札と爲りし

同年十月九日御服資金及時後三

羽織と爲り同月廿日高小着と云

十月十日京著

寛文三十二年十月三日京師以宴
類史に於て八家作料浪七貫目
と信子

寛文七十年正月廿日按列此
宗妙(系)子孫と免され同日
系と立女又日瑞系翌二月十日
系と立女二日江府小着一廿八日
相得一涉方日縁と就系

寛文八十年二月十日御以少
亥令叔時後三羽織と居り三月
交と立十日京署

寛文九十年正月十九日京と立

廿六日美寸女八日相得一御方
日縁と就る三月廿九日父貞富
失

寛文九十年七月十日縁目父よる
高増をれ六父う願知の内武列の
うちと引う縁をり

同年旦十月朔日涉暇黄金
時腹三羽織と居り又廿七日立
月十九日京署

同年十月廿日
御入内此御用と智免

寛文十一年十月十八日京と立

女九日著一十月朔日好湯

沙方同派と執ふ

寛文十二年十月六日武列世田

う谷領赤地村の新庄の田畑と

持高此外に強ふ

同年同月十日沙服黄金三時後

羽織と袴と二十六日迄と之廿七日

系著

延宝元五年五月八日寅の刻

禁裏沖洲方炎上よりして

主上の聖護院一行幸の事と早馳

との月て実事ヤサとすマヤ

う好の事と感一あり作と

奉書あり若母ふ

同年十二月廿日貞吉の卯に

病む死つとことり一実事ヤサ

ゆは八同月廿七日息男久太馬

貞治と系於キとらマ此作と

あつとこと夕貞治に府と之明

寅の年正月朔日東系ヤサと居

病む平らき一うハ

延宝二寅年二月十日貞治と

う心マに系と之廿一日に府ヤサ著

一マ女ヤサ日好湯一沙方同派と

翻つて年て御前ちかへて
此のくわいひをりて身こそ法
て後向の病ひたあはれ
あゝ

延宝二年六月廿九日芙蓉丸
間に在りて永くを玉の勢先
老妻めくちる民に思ふを
此より心ゆりてふは命を
廣之朝臣はきくらふ

同年七月廿九日けう(芙蓉丸)
の写(洞候を)或作と
延宝三年六月十六日致仕の

料三百俵と
延宝三年八月晦日年七十二歳

元和九年

大津藩阿部左馬助組 百平後 松浦忠孝 市親成

大津藩阿部左馬助組忠孝(百平後)親成

寛永元年 廣永百平後

寛永三年 月 日 組 大津藩阿部左馬助守

組

寛永二五年

天正十八年被石出

大津藩河津左馬助組

後井平衛忠次為願
河津外之人

言者 後井平右衛門元忠

後言者

元忠京大坂に宿進小系を奉

りしに

寛永九年二月廿六日

台徳院殿に沙うさみうて金

五兩

寛永十年二月七日並沙加恩

二百石武列橋樹那のうらめ

治承九年四月十二日

正保二年六月廿九日死六十歳

寛永三寅年正月廿日

大津藩松平總殿次祖平奮(政次)願

大津藩松平總殿次祖 二百俵 遠山与次郎(高)庸

二百俵

寛永九年甲申年四月八日組新大津藩内及石見守

寛永三亥年

寛永三亥年源目

大津藩松平總政改組

信於五亥年申改組願
寺島外三人

言者 勝初甚為同心房

寛永七年七月廿六日死

寛永四年十月十五日

御腰物を以て松波権平重次三男

斎藤松平経盛次祖

百平後

松波九郎清重宗

後二百後

後源重宗

四百石

之石高宗百平後と法了

寛永九年申年二月廿六日

台徳院殿の法了のみとて令了

法了

同年百平後と加へ法了凡二百後

重宗宗太坂の御腰物小系重次

寛永十三年二月七日並湯加敷二百石
是までの原米も定地ぬたう
路
武蔵の國橋那流沢村末永村
わされ凡四百石
慶安元子年六月十四日新井藩駒井右京
組

寛永四年

本村松平總殿次組

少米系古直金の安部忍願

二百俵 少米系傳之席安枝

後署名

後直金

六百石

こし原米二百俵と路

安枝系大坂の宿並小米系米夜

寛永十三年二月七日並湯加敷二百石

凡四百石

寛永十八年 月 日 孫目六百

九十石是道の四百石ハウノ一を分

兼意三年

月

日本書紀

兼意三年秋坂城ヲ築ク

兼意三年秋坂城ヲ築ク

地恩賜あり

明曆元未年十一月廿七日御加恩

二百俵凡八百九十石

明曆三年夏二条城の御加恩

二百俵

万治三年秋坂城に宿直小

寛文三年夏二条城の宿直

小

寛文三年九月八日御留守居番

同年十一月廿七日御加恩二百俵凡
百九十石

同年同月廿七日御加恩二百俵凡

天和元年九月廿九日御加恩小

列

天和二年八月廿九日御加恩小

二百俵凡八百九十石

安

貞享四年十月廿二日御加恩

寛永八年

大御書松平維教之祖

大坂御書松平維教之祖

二后 竹内権之丞吉明

後書石

改又書石

二后松平二后松平

吉明系大坂御書松平小系

寛永十年十二月廿二日沙加恩

二后松平二后松平

みなし治守武列大里郡上野村

にて丸石百石りさる

寛永二十年二月十日死三十三歳

寛永八年

本番松平總殿組

三右衛門 鈴木權四郎重氏

後七重氏

鈴木友助政務司

鈴木友助重氏

二右衛門 藤原宗三右衛門

寛永七年 西九洲小姓組

寛永九年 申年 四月八日 元組 本番

松平總殿組 (掃書)

寛永七年十一月廿日

大洲書松平縫殿殿組

大洲書松平縫殿殿組 延天世委直(重勝)物願

言後 天野小左右衛門重孝

後言卒右

寛永九年甲午二月廿六日

台徳院殿の沙之みりて金五

と給ふ

寛永十年二月七日新息二百俵

と給ふ

重孝心京大坂此勢云信小系事

度

万治元戌年 月 日 諸目書
又右是近の二百俵ハ一ノ勘子
寛文九乙未年八月三日 輝入本多兵衛守
組

貞享四年三月八日死

寛永七年

信列波合所代官宮崎守重次男

本洲藩松平維敏殿組 二儀 宮崎次郎 憑仲

政助在座

寛永九申年二月廿一日

台徳院殿の御しきみより金

と給ふ

寛永十三年八月廿二日 俵

憑仲系大坂方宿直に在る

正保四年六月廿日 大洲藩組

同年三月 日 加恩二百石

四百石

慶安元子年 月 日 坂城の

徳清に弟を遣はし、沙眼白根十時後

と給ふと世后も付恩賜ありし

慶安四年夏二条城に寄座

小年なり

美濃三年秋坂城の徳清より

明暦三年夏二条城に徳清

系系

万治三子年正月十二日御目御賀

二百俵九六百石

同年十一月十八日布衣着と免さる

寛文元 丑年八月廿六日大坂沙

目御代と令せらるる八月廿八日

沙眼美合又と給ふと十月十日

歸て松浦守

寛文二寅年十一月朔日奉り

の年四月日光に御供と令せ

らるる明の年正月廿六日

百五と給ふと四月御供とありし

天和元 卯年二月廿九日御入松浦

内松光組

元禄四年二月廿九日死七十九歳

寛永八年

本州松平總殿改組 二言後 富永三右衛門守官

後言石

本州松平總殿改組(改言總殿)

同年廣永二右衛門守官

寛永十三年二月七日並河加恩二言

石是すその二言後八右衛門守官

守官京大坂の孫玄清小守官

凡四言石りさふ

守官京大坂の孫玄清小守官

正保元申年六月二日死

寛永九年四月八日

大洲藩松平總督殿

政本友之助政務三男

西丸沖小姓組

言候 鈴木權四郎重比

後四右

及七左衛門

重比系大坂村宿並小系と奉
夜々

寛永十年二月七日華洲加恩
二百名是迄の原米二百俵も奉給
たり一法りも武列構樹那のうら
めく法りも凡四百名

寛文二年六月廿日御廣發番之取

延宝三年三月 日辨入彦
倭後守祖
元禄四年七月十二日致仕
元禄六年七月朔日死八十七歳

寛永九年甲申年四月分

慶長十九年寅年家記留

大沖書松平總殿改組

元禄小姓

日後金倉忠清為願
沖書外之人

二百石 日後金三郎忠次

後七百石

政令在書

寛永十年二月七日並沖加恩
二百石九七百石

忠次系大坂丸龜雲清小系子

正保三年正月廿二日於二条城互死四十
七歳

寛永九年甲午四月八日

元和八年六月至同洲番

南番松平總督殿

青木之命在御義之數願

六月至同洲番

百俵 青木之命在御之能

後四百石

寛永十一年戊午 月 日 録目

四百石是より後百俵の返し 献

之能系大坂の宿屋小室より

明暦二年甲午九月廿二日死

御幕奉納

寛永九年甲午年十月十九日

大御書松平總督殿御書(吉原御願)

大御書松平總督殿御書 吉原 松浦長政心書

寛永十三年 月 日 晴

六百石石と云ふ事

心書系大坂の宿直小系

寛永十七年六月十日御廣安番三頭

寛永十九年二月六日御加恩

二百石凡八百石

寛永二十年九月廿九日死卒

寛永九年甲午十一月十九日

牛奥織部昌次致
元後河原氏

大内書松平海殿致祖 三言 牛奥甚之丞昌義

寛永十三年七月六日死

寛永九申年

元和六申年被出

大洲藩松平強盛

三景後

陣内後在信公定

陣内後在信公定

陣内

後在信公定

初孫九帝

寛永十酉年二月七日並御加恩

二百石凡二百五十石

公定京大坂の御書信の事承奉

度々

兼寛元辰年九月十九日父美知丸

少之願六百石の御書信の事承奉

中後信公定六元の御書信の事承奉

仰出方

万治三子年二月廿三日大津藩組

同年 月 日坂城の宿集

糸色ハ沙喉白根十時後ニ

陸軍ハ川も甚恩賜アリ

寛文元丑年十二月十二日津加急

二百後九七百五石

寛文三卯年夏三条城の宿集

海心

寛文乙巳年二月 日辞入

組

寛文九卯年八月廿六日死六十六歳

寛永十一年六月九日

松野助平助信總願

寛永十三年 月 日海目

津藩外之人

大津藩松平總殿三言 松野友右衛門助友

助友京大坂の宿集小糸白奉

夜

寛文四辰年辞入瀧川長門守組

寛文十一亥年九月廿日死六十三歳

寛永十一年十月 日

走山法皇の某勅願

大御所松平豊永守元組

大御所松平海殿殿組 三言書 遠山新八郎安重

後各三言

改平美

安重系大坂の御書係小系守元奉

きり

正保二年十月加恩二百石為陸奥

新治郡水守村にて治り凡五百

二十石

此御加恩の事一寛永十一年二月七日の恩
に依りてあるに、陸奥の事、正保二年の
安重一人に御加恩の事あり、小系守元にて御書係の御書係
に依りて、御加恩の事あり、とて上の御書係の御書係
に依りて、御加恩の事あり、とて上の御書係の御書係
に依りて、御加恩の事あり、とて上の御書係の御書係

事に罷りて之を列小入り色ハ其時の湯及小つみ
たぐくしとてと道りしかるに中加意と事あり
りたとなり

正保四年九月三日死六十八歳

寛永十一年十月

山下又助勝忠熟后

大津藩松平豊泰守元組

大津藩松平總殿元組 百平谷 山下又助勝長

勝長系大坂の宿直小系事

夜々

寛文二年九月四日御天守番之取

寛文十一年三月七日御入小條

右邊左邊組

貞享二年九月廿九日死

寛永十一年

寛永七年辛酉

大御書松平總殿改組

加藤格在(系正惣願)

御書介之人

改格在

正次京大政(宿直)系正惣願

名号

年號月日不知詳

延宝二年十二月三日致仕

延宝四年七月十二日死六十九歳

寛永十一年

大津藩松平源次郎組 三宅 三宅豊登(勝重)

三宅 三宅清徳(源次郎)
源次郎

其後此地二百石と改めし

勝重系大坂の宿直小奉行事
度々

明暦二年十二月四日輝入小幡右近次
組

寛文二年甲申八代親下河
系村の宗地法用よりめて

御旨に依りて上総の國
武射那下總の國
あつた

寛文十三年九月十六日死七十九歳

寛永十二年正月

元和九年正月

少子流命家重子

御書外之人

大津藩松平藩殿
三喜 津藩松平藩宗明

宗明京大坂の宿車系家
事度

明暦元年十月廿二日死三十七歳

寛永十二年三月

寛永八年七月 日曾

本州松平藩殿

宣若 中澤才六郎吉清

日百平後

後才平後

右清系大坂村野田小系家

事度

寛文二年七月拜入本多義純守組

寛文五年正月死早稲系

寛永十二年

寛永七年源目

本州書松平德政組

三言若 勝部又忠清心次

備後基元庵の心房抄子

河原介之人

心次系大坂の宿直に系取事

夜々

寛文八^申年六月廿七日河原炮法書

抄

貞享二年二月十六日死字七歳

寛永十三年十月

大御前組松平遠敷組

大御前組松平遠敷組

二百俵 寛 梳登(心藏)

後八百石

改 二百俵

如左馬

寛永十三年十月朔日原米

二百俵と改

心藏京大坂の御云浦母系奉

慶安元子年 月 日 添目

八百二十石是より二百俵ハ一

在系

万治三子年二月廿三日大津毒組頭

同年月 日坂城の勢を清

に奉じて沙喉白浪板十時後三

と浪り是よりい清も十乃

恩賜あり

寛文三卯年夏二条の聖清

に在る

寛文六卯年秋坂城に宿重

在系

寛文九卯年夏京都の權清

在系

寛文十亥年四月九日津先ら頭

同年十二月廿八日布衣急と免さ

延宝二寅年二月日死年十八歳

寛永十四年

大津安房守組番金忠常題願

大津安房守組番金忠常題願
二百俵 中山積登(勝久)

後九百石

寛永十七年十一月廿百原米

二百俵と給ふ

勝久系大坂の勢湯めする事

なり

万治二年 月 日 同日九百

石是までの二百俵はうへなる

万治三年十二月廿百大津安房組頭

寛文元五年 月 日坂城の
御書に糸道八涉暇白浪村
時彼ニと信りとは云ふ月也
御恩賜なり
寛文十年春其二条城に寄進
あり
寛文七年秋坂城の法清に
あり
延宝元五年秋坂城の法清に
あり

延宝二五年六月廿六日死

寛永十文^{寅年}

大御書松平縫殿將祖

添目

言若 依野九右衛門政利

依野九右衛門政重願

御書并之入

政利京大坂江宿並小糸之事
度々

御宝後書之願

寛文十^戌年七月十八日死

寛永十八年二月十日

大洲藩松平伊賀守組市左衛門守友惣願

大洲藩松平總殿改組 二言信 松波市平正次

後三言信 改甚在信

寛永二十二年十一月十八日藤原

二言信と信守

正次系大坂の宿直に系承事

夜々

慶安三年 月 日 信目三言信

是よりその二言信ハ二一ナリ

寛文三年二月廿二日大洲藩組改

同年十一月廿六日涉加恩二百俵凡
又百石

寛文四年二月廿八日二条城の
宿直に参り六沙喉白浪村
時彼ニとらけり是より一月も
好恩賜あり

寛文七^未年秋坂城の法清小
之系なり

寛文十^戌年夏二条城の宿直
に系なり

延宝元^丑年秋坂城の法清小
之系なり

延宝四^辰年夏二条城の法清小
之系なり

延宝七^未年秋坂城の法清に
之系なり

延宝八^申年夏分 日死六十三歳

寛永十八年二月十六日

大御書松平總殿御組孫九市公之御願

大御書松平總殿御組 二言後 坪内三右衛門伊定

後七百字 政後七市

二言後と云ふは 二言後と云ふは 二言後と云ふは

伊定系大坂の宿直なる事度々 寛文九年三月 湯目七百

延宝六年三月十六日二条堀内書之段 同年七月十日沙喉黄令

羽藏之治

天和二年八月六日於二条城死

正保元^甲年六月廿七日

大津藩保科淳定組遠近所重之無願

大津藩稀垣若狭守組 三信 松平忠六郎之別

一七后高家采二百俵之治

之別京大坂の宿進小糸と奉
度々

万治元^戊年七月十九日 新津波野井

右系組

正保元^申年六月廿七日

本州青森守組

大津藩青山岡崎守組等信松松也願

二信 青木源金^信 信幸

後二百六十石

後典金

其後廣永二百後を信り

信幸京大坂八宿連小系と奉

交

明暦三年 月 日 跡目

八十石二斗是近江二百後返一御

寛文元五年甲列の宗知御用

よめ〜御り〜とて代官とて

上総の國あり二百八十石と云ふ

寛文九年二月十九日大津藩組

同年同月廿日二条城の警備

糸通ハ御暇白浪叔時後ニ

治守ト是ヨリハ以後ト恩賜アリ

寛文十^戌年十二月廿日津加恩

二百俵凡又百八十石ニ斗

寛文十二^子年秋坂城の修繕

ニ事アリ

延宝三^卯年夏二条城に警備

ニ事アリ

延宝六年秋坂城の修繕ニ事

延宝八^申年 月 日 拜入大久保

右京亮組

天和元^{乙未}年六月廿六日死六十二歳

正保元^申年六月廿七日

本州番稻垣三枝守組

本州番稻垣三枝守組と在り候事

三枝 三宅久松 清元 徳

改新次第

正保三戌年十一月

日原守

三枝と在り候事

元徳京大坂の宿屋小久保守

度々

寛文二寅

年十月廿六日

御座

元方御細戸

正保二百年七月十八日

大守書稻垣若狭守組 宣旨 後白子石

大守書稻垣若狭守組 宣旨 遠山新八郎安次

後白子石

正保四亥年 月 日、いさゝか原米
と治り、さうり、父の遺跡、二百二十
石と治る。

安次、京大坂、此宿、此に、来る、より、及、

寛文元 年十月十二日新沙、此を、山、手、倉、の
組

正保二年七月廿日

有田藩科擧正保二年七月廿日

大田藩科擧正保二年七月廿日

後六百六十年

正保二年七月廿日

延宝二年七月廿日

六十四石是すその二百俵に返す

元禄元年二月廿日死

正保二年七月廿日

大津藩稲垣若狭守組

三信 鈴木九左衛門重貴

後三信

三石屋康平二百俵と信

重貴系大坂の宿直小奉行奉

度

慶安三年 月 日 信三

是より後二百俵のえ一筋

延宝八申年九月廿日大津藩組

天和元年 月 日 三信

宍道小糸道八涉暇白浪十時後三

上陸日

天和二年二月廿六日死

正保三年十月廿四日

正保三年二月廿八日

富永三右衛門守官致願

小笠原

大津藩稻垣義守組 四景 富永久会守忠

守忠系大坂村宍道小糸系事

度々

万治元_戊年七月十九日新洲家渡邊守忠

組

正保三戌年十二月廿六日

正保三戌年三月廿八日海目三言言
中右助貞政上二百七言分知

坂本小倉の重安惣願

小倉信

大津書稀垣若狭守組

三言言

坂本久兵衛重治

後小倉

右馬依

大内託

重治系大坂村宿通江系多事

夜々

寛文元丑年十月十二日新津家書小倉重治

組

正保四年十二月廿日

正保二年 月 日 同

内後金倉の忠次郎

小善信

大津藩編組若狭守組 七喜 内後金倉の忠心

忠心系大坂の警備に系する
度々

寛文二年二月廿日大津藩組

寛文六年六月十三日大坂の

結末に系するハ沙眼 白浪 叔

時後ニ系するハ是より以前

地恩賜の事

寛文七未年五月廿日
奉書六月朔日
播磨姫路
寛文九未年
寛文十二未年
寛文十三未年
寛文十四未年
寛文十五未年
寛文十六未年
寛文十七未年
寛文十八未年
寛文十九未年
寛文二十未年
寛文二十一年
寛文二十二年
寛文二十三年
寛文二十四年
寛文二十五年
寛文二十六年
寛文二十七年
寛文二十八年
寛文二十九年
寛文三十年
寛文三十一年
寛文三十二年
寛文三十三年
寛文三十四年
寛文三十五年
寛文三十六年
寛文三十七年
寛文三十八年
寛文三十九年
寛文四十年
寛文四十一年
寛文四十二年
寛文四十三年
寛文四十四年
寛文四十五年
寛文四十六年
寛文四十七年
寛文四十八年
寛文四十九年
寛文五十年
寛文五十一年
寛文五十二年
寛文五十三年
寛文五十四年
寛文五十五年
寛文五十六年
寛文五十七年
寛文五十八年
寛文五十九年
寛文六十年
寛文六十一年
寛文六十二年
寛文六十三年
寛文六十四年
寛文六十五年
寛文六十六年
寛文六十七年
寛文六十八年
寛文六十九年
寛文七十年
寛文七十一年
寛文七十二年
寛文七十三年
寛文七十四年
寛文七十五年
寛文七十六年
寛文七十七年
寛文七十八年
寛文七十九年
寛文八十年
寛文八十一年
寛文八十二年
寛文八十三年
寛文八十四年
寛文八十五年
寛文八十六年
寛文八十七年
寛文八十八年
寛文八十九年
寛文九十年
寛文九十一年
寛文九十二年
寛文九十三年
寛文九十四年
寛文九十五年
寛文九十六年
寛文九十七年
寛文九十八年
寛文九十九年
寛文一百年

在書死

慶安元_子年六月六日

寛永二十_未年七月

日録

竹内又右衛門吉明為願

小笠原酒井紀信守組

本國稻垣若狭守組

日石

竹内又右衛門(幸和)

幸和系大坂の警備に系る友
彦

寛文又_己年十月六日大津藩組頭

同年十二月廿三日沙加屋二百俵凡
六百石

寛文六年六月十三日坂城の

警備に系ると沙加屋白根村

時後ニと流すに川州に恩賜あり
寛文九年夏三番城の宿直
にあり

寛文十二年秋攻珠の徳備小
田あり

延宝三年夏系の宿直小あり

延宝六年秋攻珠の徳備小あり

天和元年夏系の徳備小あり

天和二年六月 日蓮河加三石

凡八百石

貞享元年秋攻珠の徳備小
あり

貞享四年夏三番城の宿直
にあり

元禄三年秋攻珠の徳備小あり

元禄五年十月九日解入大之保

玄蕃頭組

元禄十一年七月三日宿直

四日後に定知になり

武列捺沢那曲田村堰村同列

大里那押切村あり

元禄十三年八月九日死六十八歳

慶安三年九月廿日

慶安元子年六月廿八日被正

松井助左衛門宗重願

三九沖嵩

本町番稀垣若狭守組

三層

松井八兵衛宗秀

改八兵衛

宗秀系大坂此宿直小宗事

之

寛文七未

年二月十八日

任

新沖嵩能勢

市十席組

慶安四年

正保三年十一月 日曆

大内書池田重方組

四十一石

後命在御
平倉

後命在御
平倉

小倉

知忠京大坂の宿屋小倉と奉
度

寛文二年十月十九日小倉渡を以

寛文四年十二月二日

寶樹院君十三回の時遠福の御用

と替りて置ありとて時後羽織

法系

寛文十戌年八月十日御家山の
御宮と修せらるる法用と誓て
芳切りとして黄金三降後羽織
と法系

延宝三卯年六月十日

本理院君周実九法追福法用

と誓りて芳切りとして白根十

降後三と法系

延宝四辰年八月七日

御産所御葬式御法事法用

と命せらるる同月廿八日付

事に芳切りとして降後羽織
と法系

延宝六午年二月十日

天樹院君十三回の法追福法用

と誓て芳切りとして降後羽織

と法系

延宝八申年七月十三日奥方

と造せらるる法用と誓りて

芳切りとして降後羽織と

法系

天和元年九月廿六日御家山

但馬守組

元禄十三年九月廿六日死



